

# 1 研究主題

## 互いに認め合い、共に学び合う

～自己との対話・他者との対話を通して、学びを深め、よりよく生きる～

## 2 研究主題設定の理由

文部科学省、中教審答申『「令和の日本型学校教育」の構築を目指して』(R3.3.30 更新)では、「新学習指導要領の着実な実施」「GIGAスクール構想の実現」「学校における働き方改革の推進」などが掲げられ、取り組むべき課題が多くある。本校も例外ではなく、新学習指導要領に準じた「主体的・対話的で深い学び」の実現へ向けた取組や一人一台のタブレットの活用、教員の働き方改革を日々実践している所である。

本校は今まで「聴く」「話す」を中心に添えて研究に取り組んできており、学習指導要領と重なる部分も多くある。児童が「主体的」「対話的」に学ぶ手立てとして、「課題・場の設定(授業のデザイン力)」「教師の姿勢(ファシリテート力)」「自己との対話、他者との対話(なかふじの『聴く』『話す』)」を柱として研究の推進を行ってきた。その中で、児童自身が「聴く」「話す」の意味や価値を少しずつだか感じることができるようになってきている。教師が「聴く」「話す」を意識した授業づくりをすること、そして、児童自身が学びや生活の場面で「聴く」「話す」ことを活用しながら、その有用性を感じるという相互の作用により、対話の素地がつくられてきたと言える。

本校は今まで、昨年11月17日に行われた全国小学校道徳教育研究大会に向けて、道徳科の授業研究、道徳教育の充実を図ってきた。中藤小は大規模校で教職員の入れ替わりも多い。また、若手の教員の割合も高い。その中で全教職員が協働して研究に取り組めるような組織づくりをしてきた。今年度は、今まで培ってきた道徳科の研究を継続しつつ、道徳一色ではなく、「対話」を中心に捉えながら、少しずつ他教科・領域にも広げていきたいと考えている。研究体制としては、昨年度に引き続き、全教員が「授業づくりグループ」に所属し、5つのグループに分かれ授業研究を行っていく。全ての教員が授業をすることで、学校全体の授業力を高められるよう努めている。また、日常的にも授業についての話が自然とされるようになってきており、教員の意識の高まりも見えてとることができる。

道徳科の充実がすぐに実践力として目に見えてくるのは難しく、研究も半ばである。ただ、教員が短絡的になって、道徳科の授業が生徒指導や徳目主義的な道徳にならないように気を付け、「考える道徳」「議論する道徳」になるよう日々の授業改善を行いながら研究を進めている。

「学習指導要領 第1章 総則」において、「道徳教育は学校の教育活動全体を通じて行うもの」とされている通り、あらゆる場面で児童の心の成長を促したい。そして、心の成長はあくまで自分の中で生まれる変化であるが、そういった成長は自己の中だけで完結されるものではなく、他者とのかわりてこそ生まれるものなのである。そこで対話を手がかりに、「互いに認め合う」ことを目指し、各教科や生活の中で「共に学び合う」関係をつくっていきたいと考え、研究主題を「互いに認め合い、共に学び合う」に設定した。

## 3 研究の内容(学校全体の研究)

### (1) 研究主題のとらえ方

#### 「互いに認め合う」とは

- ・相手を思いやりながら、思いや考えを適切に伝え合うこと。
- ・自分のよさに気づき、他者のよさに目を向けること。
- ・児童相互に温かい心の交流が生まれ、思いやり、協力、助け合いなどの豊かな人間関係が育つこと。
- ・学習活動に意欲的に取り組み、主体的な学びの中から、学ぶ楽しさや喜び、達成感や成就感をつかみ取ることができること。
- ・自己を表現したことが集団の中で価値あることとして認められ、もてる力を発揮できること。

## 「共に学び合う」とは

- ・他とのかかわりを楽しいと感じ、かかわり合うことの価値に気付くこと。
- ・一人一人が自分の考えをしっかりと、話し合いに参加できること。
- ・一人一人の願いや思いや活動が、さまざまな仲間や先生、地域の人と協働することで深まっていくこと。
- ・自他の体験の共有により、豊かな体験に裏打ちされた見方・考え方ができるようになること。

## (2) 研究の3つの柱

### 研究の柱① 課題・場の設定(授業のデザイン力)

児童が、対話的な「聴く」「話す」を行うためには、児童に「話をさせる」という視点ではなく、児童自身が「話したくなる」という視点に立った課題づくりが大切である。教師が「探究」「目的意識」「必然性」「意外性」「当事者性」「多様性」「対立」「自己有用感」を意識して、あらゆる場面に応じた課題の設定を工夫することで、児童の意欲を駆り立て、話すことの必要性を感じることができるようになるだろうと考える。

また、ペア・トリオ・グループを意識的に設定したり、児童同士のかかわりを意識したりしていきたい。そこでも「ペア」「グループ」ありきの授業構成ではなく、教師自身がその目的をしっかりと捉えながら「話し合う場を保障するために」「自信をつけさせるために」など意図的に行うことでより効果的になると考えている。他にも、ホワイトボード・付箋・思考ツールなどを活用して思考の可視化を図っていき、互いの考えを共有しやすくしていく。そして、何よりも児童が、安心して自分の考えを話すことができる温かい雰囲気づくりを行いたい。

### 研究の柱② 教師の姿勢(ファシリテート力)

まず、教師自身が、児童にとってよいモデルとなっていきたい。児童の声を聴き、どう応え、反応していくのか。そして、児童の思考を深めるために、どのようにして声かけをし、働きかけ、価値付けていくのか。今一度、教師の姿勢・立ち振る舞いを考えていきたい。児童が教師をモデルとして捉えるだけでなく、児童同士のかかわりの中でもよい関係や言葉のやりとりが生まれる場面もある。そういった場面も教師が逃すことなく価値付けていくことも教師の姿勢として大切なことになってくる。

「教師の姿勢」を育てていくためには、日々の授業からの意識付けが大切になる。しかし、日々の中で忙殺されてしまうのも現実である。個々の技量に任せるのではなく、教師集団として協働することが必要になってくる。授業や児童とのかかわりを気軽に見合い、フィードバックし学び合うための場を今までも本校の研究として取り組んできた。本年度も、全教員が授業づくりグループに所属し、一人一授業をし、ミニ研究会を行いながら授業力の向上、教師の姿勢の高め合いを行っていきたい。

### 研究の柱③ 自己との対話、他者との対話(なかふじの「聴く」「話す」)

児童が、課題を追究し、深めるために、6年間を通してどのように指導していけばいいのか、中藤小学校の児童の実態に合わせて考えていきたい。「対話する」「議論する」土台として大切なことは「ことば」をしっかりと意識することである。一般的に言われる語彙力を高める指導は国語科を中心に、各教科の指導事項をしっかりと押さえることが大切である。これを「学ぶ対象のことば」とすると、柱の対話力を育む上で大切なことは「学びを媒介することば」の成熟だと考えた。そして、この「学びを媒介することば」は、児童が失敗しても繰り返して使うことで、自信につなげていくことが必要である。また、学級の雰囲気として感じたことを素直に表現してもよいという安心感をもてるようにすることが大切だと考えた。

このように、対話の「量的確保」をすること、そして、正解のみを求めるような発問ではなく、児童が自然と語りだす、聴き合うような対話の「質的転換」を目指していくことが、「自己との対話」「他者との対話」を生み出し「深い学び」に迫るための手立てとなっていくと考えた。

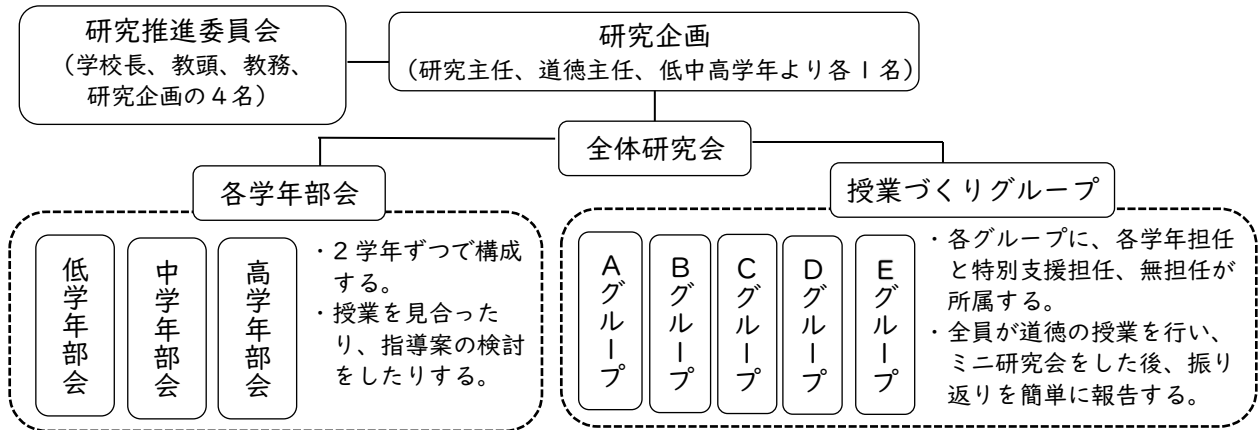
### (3) 研究の組織

#### 【教師協働でつくり上げる授業】

中藤小学校は先述の通り、大規模校で教職員の入れ替わりも多い。そのような中で全教職員が協働して研究に取り組めるような組織づくりを以下のように行っていく。

- ・授業づくりグループでの授業実践検討  
5グループに分かれて、年1回すべての教員が授業公開の後、ミニ研究会の実施
- ・学年協働による授業づくり（道徳科）
- ・学年での教材研究  
各担任・副担任が一つの教材で各クラスの授業を行う。そうすることで一つの教材に力を入れて研究を行うことができるとともに、負担の軽減も意図している。また学年の児童を学年全教員で見るという協働も狙っている。
- ・協働による省察  
実践記録は、同じ学年の教員全員で書く。

#### 【研究組織図】



#### 各学年部会（ペア学年）

低学年部会	◎酒井、伊東、植坂、峯村、木村、久藤、小川、北島、坂部、中屋
中学年部会	◎出雲、齋藤、石川、三屋、経石、森下、友田、小竹、五十嵐
高学年部会	◎西川、米村、野口、大石、安達、飛山、古市、馬場、桶屋、三崎、河村、畑中、山本、院：中村、伊達

※堀江・向本・竹山は所属しない。

#### 授業づくりグループ

	A	B	C	D	E
1年	/	伊東	/	峯村	★植坂
2年	小川	酒井Ⓜ	★木村	★久藤	/
3年	/	三屋	石川	/	齋藤Ⓜ
4年	経石	/	森下	出雲Ⓜ	友田
5年	米村	野口	大石	/	安達
6年	★馬場	★三崎	西川Ⓜ	桶屋	/
なかふじ	/	五十嵐	/	中屋	山本
無担	坂部 山越	(向本)	畑中 (小竹)	(堀江) (飛山)	北島 (河村)

★…授業グループリーダー    Ⓜ…研究企画